

東日本大震災のフィールドワーク・最終報告書

地域の復興・振興を見る視点の在り方 ～地域と個人の関係性をいかに捉えるべきか～

早稲田大学法学部 4 年 堀翔貴

目次

はじめに

- 1、本研究における問い
- 2、先行研究
- 3、本調査（令和 6 年 8 月 6 日）の概要
 - 3-1、岡本さんに調査を行った理由
 - 3-2、岡本さんの経歴
 - 3-3、自己実現と地域貢献の同一化
 - 3-4、目標設定の単位は個人
 - 3-5、地域は個人の選択肢の一である
 - 3-6、「人と人との化学反応」としての地域
 - 3-7、インタビューのまとめと考察
- 4、追加調査（令和 6 年 11 月 9 日）の概要
 - 4-1、岡本さんが個人という単位に注目したきっかけ
 - 4-2、大きな課題に向き合う上での、個人というアプローチ
 - 4-3、追加調査の小括

おわりに

はじめに

令和 6 年元日に石川県を襲った能登半島地震は、過疎地の復興の在り方に関する議論を喚起した。財務省の財政制度審議会・財政制度分科会は、被災地の人口減少を踏まえ将来の需要減少などを考慮した集約的なまちづくりを提言し¹、これを受けて馳浩・石川県知事は「いわゆる過度な投資にならないようなという受け取れる表現は、…（中略）…創造的復興のプランを検討しているときに、正直冷水をバケツでぶっかけられたような気持ちである」

¹ 財務省、「財政制度分科会（令和 6 年 4 月 9 日開催）」配布資料
(https://www.mof.go.jp/about_mof/councils/fiscal_system_council/sub-of_fiscal_system/proceedings/material/zaiseia20240409/02.pdf [最終閲覧 2024.12.10])。

²と反応した。震災復興と将来の地方の在り方は密接に関わる分野であり、過疎化する地方の復興に対する温度差は、今後ますます議論しなければならない。

このような温度差は、着目する視点の違いに起因するものであると私は考える。マクロに俯瞰した視点においては全国の中の過疎地域の一としてしか見られない地域も、ミクロな視点で地域を見ると、例えばある個人にとりかけがえのない地域であったりする訳である。視点の大きさをどのレベルで設定するかによって、地域やその復興・振興への考え方は変わってくる。例えば、私が令和 6 年 2 月から 3 月にかけてインターンシップを行った島根県知夫村役場の視点は、個人単位のミクロな部分に焦点をあてる典型例である。求人情報ウェブサイト Wantedly・知夫村役場インターンシップ募集ページにおいては「人口減少は宿命でも、今いる人が幸せに暮らしていける島にしたい。」とし、「魅力的な島を守るため、知夫村に住んでいる村民が知夫村に誇りを持ち、この地に住み続けたいと思えるような魅力ある島へ変えていくこと」がミッションとして掲げている。人口が減ってもなおその地域に住み続けたいという個人を視点の焦点とした地域振興の在り方である³。

令和 4 年 4 月 20 日から 21 日、及び同 11 月 9 日に、私は石川県で災害ボランティアに参加した。ボランティア受け入れのキャパシティ不足や、アクセスの悪さ、被災地域の広さに比しての役場の数の少なさなど、地方における復興の困難さを目の当たりにした一方で、「ふるさと能登をあきらめない」と、必死に作業にあたる個々人の姿も非常に心に残った。地域の復興・振興を考えるにあたっては、俯瞰してマクロに地域を見る視点と、個々人という単位で地域を見る視点の双方が必要である。

本研究は、そうしたマクロな視点とミクロな視点の関係性をいかに捉えるかを探ることを目的に行ったものである。地域の復興・振興を考える上では、マクロに、地域という個人より上の単位で視点の焦点を設定するか、ミクロに、そこに住む個人そのものに視点を置くのかといった視点の設定が重要である。そうした視点設定を行うにあたり、問題となる地域と個人が、いかなる関係性にあり、どのように視点設定に落とし込むかを知ることが有益である。本研究は、陸前高田市で東日本大震災からの復興や地域の振興に従事する方に実際にインタビューを行い、どのような視点設定の下で地域の復興・振興に携わっているかにせまり、そうした地域課題に対する視点設定の在り方を考察したものである。

1、本研究における問い

² 石川県「記者会見の要旨（質疑応答）-令和 6 年 4 月 11 日」

(https://www.pref.ishikawa.lg.jp/chiji/kisya/r6_4_11/2.html [最終閲覧 2024.12.10])。

³ 私が知夫村で感じた個人と地域の関係については、私が知夫村役場地域振興課公式 note に寄稿した記事に詳しい。

ちぶり島公式 note（知夫村地域振興課）「「地方の人はさ～」一ちょっと待って！その話、主語が大きくない？ ～課題解決を、ミクロに、もっとミクロに見る～（2024.3.19）」(https://chibuvill.note.jp/n/nb1aeb4a993a1?magazine_key=m4eb3c909da7a [最終閲覧 2024.12.10])。

フィールドワークを経る前は、私は知夫村で活動する個人や能登で見たボランティアに接した経験から「地域の維持や発展が、損得・コストを超えた個人の当該地域への想いに立脚するものであるとした時、地方の被災地の復興もまたこうした個人の想いに依拠するものである。」という仮説を立て、「陸前高田を復興し、陸前高田を次につなげるに際して、そこにどのような個々人の損得を超えた想いが存在したか。」を探究のテーマに設定し、フィールドワークを実行した。「コスト」という言葉と共に損得の文脈で地方の復興が語られる中で、陸前高田においてはコストではない個人の想いがいかに作用し復興につながっているかを探究し、今後の被災地の復興及び地方の在り方を考えていくことをテーマとしていた。

しかしながら、フィールドワークを進めていくうちに、地域を個人の活動の前提と捉えるか、あるいは、個人が地域の前提であると捉えるか、という視点設定の違いが、地域の復興・振興を考える上で重要となるのではないかと考えるに至った。蓋し、地域のために個人があるのか、あるいは個人のために地域が存在するのか、といった視点の設定の仕方こそ本来議論しなければならないのである。そこで私は、今回のインタビュー内容を、地域の復興・振興に際し地域と個人という 2 つの視点の層が、いかなる関係にあり、問題の焦点をあてるに際し、その両者の関係性をいかに捉えるべきかを問いとして立て、検討することとした。

本研究で取り扱うのは、令和 6 年 8 月 6 日の本調査と同 11 月 19 日の追加調査の 2 回に分けて高田暮舎理事長・岡本翔馬さんに対して行ったインタビューである。なぜ岡本さんにインタビューを行ったかなどの経緯については第 3 章で詳述する。

2. 先行研究

大災害からの復興は、地域の問題を再考する契機になる。公益財団法人福岡アジア都市研究所会員研究員であった藤原正教は、「神戸市を中心とする大都市圏が被災した阪神・淡路大震災と、小さな過疎の市町村を中心に被災した東日本大震災では、復興の仕方は明らかに異なって然るべき」とした上で、人口の少ない小規模市町村の復興は、「市街地を中心に一から造り直すようなもの」と指摘し、同時に「東日本大震災の復興は、地方におけるそうした（高齢化や過疎化など。堀注）問題を同時に考えるチャンスと捉えることができる」とした⁴。過疎地域の被災地の復興と町づくりは、分離しがたい問題であり、復興の在り方は町の在り方に直結すると言えよう。

大都市への人口集中と農村の過疎化に対抗して起きた地域おこしや村おこしを内発的発展の一形態として捉える見方が存在する⁵。鶴見和子によれば、内発的発展の概念は、地域

⁴ 藤原正教「人口減少社会における東日本大震災復興の課題 ―気仙沼市での復興支援体験を通じての備忘録―」公益財団法人福岡アジア都市研究所、2014 年 (<https://urc.or.jp/wp-content/uploads/2014/03/46889a0cca9a5017e9daf87ff1eec9ef.pdf> [最終閲覧 2024.12.10])。

⁵ 鶴見和子「内発的発展の理論をめぐって」1991 年 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasess/10/0/10_KJ00002554340/_pdf [最終閲覧 2024.12.10])。

⁶ 鶴見は、その著書『内発的発展論の展開』（筑摩書房、1996 年）において、内発的発展を「目標におい

を分析の単位とする点に独自性があり、国民国家を単位とする従来の近代化論とは一線を画する⁷。内発的発展の単位としての地域について鶴見は、定住者が生活を営み、定住者間及び定住者と漂泊者との間に相互作用が行われ、新しい共通の紐帯を作り出す可能性のある場所と定義している⁸。同時に鶴見は内発的発展の担い手が「地域内の強烈的個性を持った複数の個人」すなわち「キー・パースン」とであると指摘している⁹。ここにおいて、内発的発展の単位たる地域は個人の相互作用が行われる地域である点や、担い手が個人である点を鑑みると、内発的発展は個人の作用を極めて重要な要素にしていると言えることができる。過疎地域の復興と町づくりが、過疎化に対抗する地域おこしたる内発的発展の一形態として捉えられる場合、過疎地域の復興と町づくりは個人の作用が極めて重要となるということができる。地域に経営の思想を持ち込み「地域経営」という概念を提唱する友成真一は、地域づくりに際してはモチベーションの獲得が最大の課題となり、またこれは個人たる自分を見つめることと直結するとした上で、「多様な人たちが互いを刺激し合い、化学反応を起こして、新しい動きが生まれる」のが、地域のあり方だと主張する¹⁰。このような、個人の作用が地域を形作るという視点は、地域という概念の把握の前提は個々人の活動であるという立場に立脚するものである。

一方、個々人の活動の前提として地域が必要であるという視点も存在する。望月美希は、住宅やインフラなどのハード面だけではなく、個々人の「生きがい」に注目した震災の復興に関する研究を行った。望月は、個々人の生きがいに関する問題は制度や公的機関による一律的対処が困難であるが故に、個別具体的に問題を共同解決する地域の重要性を指摘する。生きがいなどの私的な問題は、地域という共同の基盤をもって乗り越えるものであることを明らかにした¹¹。先述したような、個々人の集合や関わり合いが地域を形作る、という視点ではなく、個々人の問題解決のために、地域が形作られる必要があるという視点である。

以上のように、被災地の復興は地域づくりと表裏一体である。地域づくりにおいては、個々人の関わり合いや相互作用が不可欠であり、かつこれらが地域の基本要素である。一方で、個々人の問題を解決するために地域という概念が必要であるという見方もあり、そのように考えると、地域と個人の関係は、互いが互いを必要とするものであり、相互に分離・独

て人類共通であり、目標達成への経路を創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上のすべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すこと（同9頁）」と定義している。

⁷ 鶴見和子「内発的発展論の系譜」鶴見和子、川田侃編『内発的発展論』（東京大学出版会、1989年）、43-64頁。

⁸ 鶴見和子『内発的発展論の展開』（筑摩書房、1996年）、25-26頁。

⁹ 鶴見和子「アジアにおける内発的発展の多様な発現形態」鶴見和子、川田侃編『内発的発展論』（東京大学出版会、1989年）、241-262頁。

¹⁰ 友成真一『「現場」でつながる！ 地域と大学』（東洋経済新報社、2004年）、255-259頁。

¹¹ 望月美希『震災復興と生きがいの社会学―〈私的な問題〉から捉える地域社会のこれから―』（御茶の水書房、2020年）、220-223頁。

立てない概念であるということができよう。

3、本調査(令和 6 年 8 月 6 日)の概要

本調査は、令和 6 年 8 月 6 日 13:30～15:30 に桜ライン 311 事務所にて、高田暮舎理事長・岡本翔馬さんに対して行われた。本インタビューには、私の他に、同授業を受講している伊勢美里奈さん及び高木こころさんが同席した。

3-1、岡本さんにインタビューを行った理由

高田暮舎は、「ポジティブな過疎地をつくる！」をビジョンとして、陸前高田への移住相談などを行う特定非営利活動法人である。「“自分らしく生きたい”移住者が集い、その想いを実現し、10 年後も住み続けたい陸前高田にする。」をそのミッションとし、陸前高田市から、陸前高田市移住定住総合支援業務を請け負う¹²。2017 年、Uターン者 2 人、I ターン者 3 人、生粋の陸前高田市民 2 人の 7 人で設立された¹³。当初は、過疎の進む被災地の復興にあたっての損得を超えた個々人の想いに焦点をあててインタビューを行おうとしたため、高田暮舎であれば、過疎地たる陸前高田の今後、復興にあたっての個々人や想いにせまれるのではないかと考えた。

3-2、岡本さんの経歴

岡本さんは 1983 年、陸前高田生。高校卒業と共に陸前高田を離れ、大学卒業後は東京で建築関係の仕事に従事した。震災を機に陸前高田に戻り、現在は①震災の記憶の伝承、②若年層のまちづくり、をテーマに 4 つの NPO 法人を経営している。

高田暮舎は岡本さんの経営する NPO 法人の一である。東日本大震災直後、全国からボランティアや復興関係の業務を行う人が陸前高田に入るようになり、それをきっかけに陸前高田に移住する人が現れるようになった。しかし当時の行政は震災前から陸前高田に住む人の支援で精一杯であり、外からの移住者の支援にまで手が回る状況ではなかった。そこで岡本さんらが陸前高田市にかけあい、市から移住定住支援を業務委託して引き受けるようになった。このようにして、2017 年から活動をしているのが高田暮舎である。

以下では、岡本さんのお話を①自己実現と地域貢献の同一化、②目標設定の単位は個人、③地域は個人の選択肢の一である、④「人と人との化学反応」としての地域、という 4 つの論点で括り分析をしていく。

3-3、自己実現と地域貢献の同一化

¹² 高田暮らし「高田暮舎について」(<https://takatakurashi.jp/takatakurashisya/> [最終閲覧 2024.12.10])。

¹³ ココロココ「「ポジティブな過疎地を創る！」陸前高田とヨソモノをつなぐ『高田暮舎』の挑戦」(<https://cocolococo.jp/22777> [最終閲覧 2024.12.10])。

岡本さんは、陸前高田での活動の原体験となる東日本大震災と自らの関係について以下のように話してくれた。

岡本（敬称略。以下同じ。）「もともとの僕にとっての東日本大震災のいわゆる原体験っていうのは、えーと、その当時、町に対して何もしていない自分が生き残って、地元のために頑張ってた同級生とか後輩が結構軒並み死んだっていうことが僕にとっての東日本大震災。なので、生き残ったことに対する後悔と罪悪感みたいなものが出発地点になっています。だってそうじゃん、地元のために頑張ってる人が生き残って、そうじゃない奴が死んだ方が町のためにはよっぽど正しいことだと、その当時は。まあ今も思いますけど。でもまあそのこと自体は、もう変えることができるものではないので、じゃそれに対して自分が何ができるんですかってことを考えた時に、えーまず、亡くなっていった、彼らの分まで生きるってことをコミットメントしよう、大事にしようってことが一つ。で、さらにいうと、彼らの代わりにはなれないかもしれないけど、彼らが震災前に担っていた、この町においての若者としてのやるべきことというのを、僕もできるんじゃないだろうかっていう風に考えたっていうところが出発地点になっています。」

当初、岡本さんは「後悔」や「罪悪感」を主な動機として活動を開始した。避難所の運営の手伝いを最初の活動とし、以来 13 年、複数の NPO を経営するまでには様々な想いの変化があったという。

堀「そういった陸前高田に対する想いというのは、これまで震災が起きてから避難所の運営をするところから、変遷とか、関わっていく中で想いの変化はありますか。」

岡本「もちろん。変化の塊ですよ。この 13 年間。最初は結局、あの一、自分の欲の為に始めてる訳ですよ。死ぬ順序が違う、後輩であったりとか同級生に顔向けができるようにまず目の前のことをちゃんとやろうというのがあって、自分の欲ですよ。自分の後悔を自分で晴らしたいからっていうふうなところでスタートしていききましたけれども。この 13 年間で、最初はさ、こんな組織預かるとは思ってませんでしたから、自分さえ良ければ良かった、究極。避難所の運営ちゃんとお手伝いして、自己満足でこの人たちの役に立てたなって思えばそれでオッケーっていうところでスタートする訳ですけども。やっぱり時間が経っていく中で、関わる人、預かるお金、スタッフなんかは僕に人生預けている訳ですから、だからその人たちからもらっているものをどう成果につなげていくか。お金がまわるようにしていくか。で、法人は規模がどんどん大きくなっていくと、それだけお金出してくれる人、関わる人、雇用する人、そのまわりの人たちとどんどん増えていくわけなので。そういった意味で、経営者としてどんどんステージが上がっていく。てなると、もう、僕もういいや、もうおなかいっぱいだからやーめたってことはできない。だか

ら、これに関わる人たちにいかに満足してもらえるように、コイツに託して良かったなと思ってもらえるような、人でありたい。みたいなものはこの13年で全然違いますね。」

岡本さんの中での想いの変遷は、自らの活動が「自分の欲」のための活動から、他者との関わりの中での活動として定義し直されたというものである。「自分さえ良ければ良かった」という性格の活動が、「関わる人たちに満足してもらえるように」というものに変遷した過程は、個人に向けられていたベクトルが徐々にまわりや地域に向くベクトルと合致していった過程であると言える。個人の欲求と、地域への関わりが同一化され、自己実現と地域貢献が同一のものとなったとすることができよう。

こうした、個人の欲求が直接地域に影響を及ぼすという、個人と地域の関係性は以下に見る岡本さんの活動を考える上でも重要となる点である。

3-4、目標設定の単位は個人

岡本さんの持つ地域の人口減少と過疎に対する視点は従来型の経済的指標や単なる数字ではない。

岡本「じゃあ人口が減るのって、なんでもかんでも悪いことなんですかっていうと、まあそうじゃないよね、というふうに僕たちとしては考えていて。人が減ってったとしても、そこに住んでる人たちが幸せなんだったらそれで良くないですかっていうふうなこと。…

(中略) …僕らって経済のためだけに生きてますかっていうと、そうじゃないでしょっていうのが僕らの言い分。なので、過疎地域になってもそこに住んでる人たちがハッピーなのであれば、それは、これからの現実的な、自治体のありようの一つとして、ありますよねと。」

岡本さんの活動は、視点が具体的な個人に向けられている点に特徴がある。高田暮舎のいう「ポジティブな過疎地をつくる！」は、震災の有無に関わらず過疎地であり続ける陸前高田の状況を、地域という単位で見るのではなく、個人の幸福に焦点をあてた形で捉えている。

岡本「高田暮舎は基本的に個人にフォーカスをしているんです。だから、そこそこ食うのに困らないお金があったら、大事なのは自分が幸せだと思えているかどうかだと思うんですね。…(中略) …人の幸福度っていうのは、経済だけでははかれないなっていうふうに私自身はすごく思っているし、高田暮舎もその感覚で基本的にはやらせていただいています。…(中略) …経済じゃないところの伸びしろっていうのにフォーカスをして、幸せだと感じられるような町であった方が、過疎地域としては正しいやり方だなという風に思っています。だから個人にフォーカスをしています。」

ここにおいては、主語が大きく語られることはない。個々人を最終目標とすることで、個々人を一括りにしがちな経済的指標とは異なる指標の設定が行われている。これは、従来型の、GDP や単に数値としての人口数などの、個人という単位よりもマクロな層での目標設定とは異なるものである。地域は、個人よりもマクロな層や数値のためにあるのではなく、個人という単位のために存在しているという視点が、ここでは伺える。このミクロな視点設定は、岡本さんの活動の大前提である。

3-5、地域は個人の選択肢の一である

個人が地域の目標設定の単位であるとした時、地域はどのような存在として立ち現れてくるのであろうか。

堀「例えば、陸前高田に新規で入ってきたっていう人が、…（中略）…陸前高田という地域が持つ特性に惹かれて入ってきたけれども、その人（のライフステージ等が）が変わっていく中で、やっぱ陸前高田違うかもなって出ていく人というのは」

岡本「もちろんいます。でも僕からすると、ちょっとぎつくばらんな表現だけど、出てっってもいいと思っています。…（中略）…選ばれる町であるということがすごく大事なポイントだと思っていますし、入ってきた人たちが、入らないと分からないこともやっぱり一定数ある訳ですよ。だからなんか違うなっていう時に、無理矢理、「いやいや、ここにいてくださいよ」みたいなしがみつくような自治体よりも、「え、違うところ引越せば良くないですか」みたいな。そっちの方が気持ち良くないですか、来る人からしたら。だから僕は別に、出たいんだったら出た方がいいと。さらに言うと、そうやって、笑顔で送り出してくださる自治体・地域の方が、住む場所は変わるけど、また会いに行きたいなと、時々遊びに来たいなと思ってもらえる確率が高くなるじゃないですか。…（中略）…さらにいうとそれはその人の新しいスタートな訳ですから、違うところに引越そうというのは。それは逆に応援してあげるべきことだよなっていうふうに思っています。」

ここから見て取れるのは、地域は自己実現の手段であるという価値観である。地域は個人の自由選択の一として位置づけられている。地域にとって、自由な個人に選ばれる選択肢として自らの立ち位置を定義することが、生き残りの道であるという前提に立つのである。岡本さんの個人と地域の関係性に対する態度は、総合すると地域の目標はそこに住む個々人の幸せであり、それを前提に地域が存在するというものであるということができよう。

こうした、地域が個人の自由意思の選択肢の一であるという価値観は、岡本さん自身の活動原理にもあてはまる。

伊勢「今までの話を聞いていて、そのかなり個人の幸せを、法人として願っているってい

うあり方で、あまりその陸前高田にこだわっている理由みたいなものを私はあまりよく理解できなかったんですけど、そのところは、こういった点でしょうか。」

岡本「高田に対してのこだわり…僕が高田に対してのこだわりがまずないっていうのが多分そう思われた印象のベースになっていると思います。」

伊勢「まちづくりというよりは個人が幸せであればいいっていう、その考え方でいらっしゃる中で、この地を選んでこの地でやってる理由っていうのは、やはり被災地だからこそうってということなんですか。」

岡本「まあひとつはやっぱ地元だからっていうのはあります。先ほど今日の最初の自己紹介で話した通りで、あの、僕一応、地元があるので、まあなんだろう、地域に対する愛はある訳ですよ。…（中略）…まあその愛着みたいなのはきっかけの一つにはなっているなとは思いますが、でもそれとこれとはちょっと話が別なところはあって。うん、なんだろうね。…うまく伝えてあげられるかな。その人が幸せであればそれでいい、てなった時に、必ずしもこの地域じゃなくてもいいってことになるじゃないですか。だから僕は、自分が幸せだと感じられるところに住みたいということであれば、それは「高田だから」じゃないんですよ。だから僕は高田に対しての愛着が割と希薄なんだと思います。何を重要視するかっていう時に、地縁であるということに僕は重きが置かれなないんです。自分のやりたいことであったり、応援してくれる人たちであったり、一緒にやっている人たちが、ハッピーになることの方が重要なので。それは必ずしも陸前高田でなくてもいい、と究極的なところは思います。」

岡本さん自身も、自由な選択のもとで陸前高田を選択し、自己実現を行っていることが明確にされている。その地域のために、ではなく、自己実現のためにその地域にいる、という論理の中で、その地域は個人の前提として存在していない。これは、当初「自分の欲」のために活動を始めたが、自己の欲求が地域への関わりと同一化していったという経緯とも符合するものである。

岡本さんは、地域を自らの自己実現の手段と捉えているのと同時に、個々人の自己実現の手段として陸前高田という地域を発信しているのである。

3-6、「人と人との化学反応」としての地域

個人の自己実現の手段として位置づけられる地域は、一体どのような性質を持つものなのだろうか。地域のどのような部分が、個人の選択に訴えるものとして発信されるのだろうか。岡本さんの視点の中では、「人」というキーワードが、選択肢としての地域の要諦として位置づけられている。

堀「今現状として、高田暮舎としては、陸前高田は何がアピールポイントで、こういうことを求めている人には向いてるよっていうようなところはどいったところがありますか。」

岡本「この町の魅力は何か、陸前高田市としての推しは何かってことだと、「人」という風に設定をさせていただいています。」

堀「地域の人ということですか。」

岡本「そう。地域の人。いろんな面白い人たちがむちゃくちゃたくさんいる自治体なので。そこを推すっていうふうな。まあそれは東日本大震災で、変わった人もいれば、元々おもしろい人もいる訳ですけど、なんだろうな、人を惹きつける魅力を持っている人たちが、この町は多い。他の自治体よりやっぱり多い。だからそこを推すっていう風な感じ。」

伊勢「他の自治体よりも多いと思える根拠はどこですか。」

岡本「根拠…肌感覚なんですけどね…でも、なんていえばいいのかなあ。例えばですけど、おじいちゃんおばあちゃん、この町で、SNSやってる人結構多いんですよ。それは要するに自分がメディアとして発信する手段を持っているということ。そういう人たちが多いですねこの地域。でそれはなんで多くなったかっていうと、震災前は全然いなかったんですけど、東日本大震災で日本全国の人とつながるためにSNSを使い始めたこの地域のおじいちゃんおばあちゃんてむちゃくちゃ多くって。だからSNSの普及率みたいなのは高いと思います。他の自治体と比べて。それはまあ被害があったからってことでしかないし、日本全国の人たちとつながる必要性があったからということもあると思うんですけど。で、中には外の人たちとつながって一緒に何かやったり、関わるってことに、人生の楽しみを覚えている人たちがどんどん増えていくので、そうすると外の人たちとの関わりを肯定的に、自主的にやる人たちが一定数増えていくと思うんですよ。そういう人たちっていうのは、やっぱり他の震災のない地方都市に比べると割合としてすごく高い。でやっぱりそういう、なんだろう、まあ僕もその中の一人ってことに多分カテゴリーとして分けるとなると思うんですけど、そういう人ってやっぱりエネルギーだし、基本的には、この人どうなってくんだろうなあって気になる人というか。そういう人が高田はいる気がしますね。」

伊勢「震災きっかけで、視点が外に向かれてる方が、開かれた方が、多い」

岡本「多い。それは明確に多いですね。だからそこに僕は高田の可能性を感じるんだろうな。だから究極、僕昔の高田に戻ってほしくないんですよ。震災前のあの閉鎖的な地方都市としての高田には戻らない方がいいなと思っていて。だから震災以降にある、この、災害によって強制的に開かれた陸前高田っていうのが、僕は割と結構に気に入っていて。…（中略）…実際日本全国の人たちが入って行って、開かれた地方に感覚的に近づいていると思うんですよ。だからこの開かれている感じっていうのを維持しつつ、地域の良さも維持しつつっていうのが、この町が目指すべき方針だろうなっていうふうな気がします。僕別に地域コミュニティをぞんざいに扱いたい訳ではなくて、地域コミュニティは地域コミュニティで良さもあれば悪さもあるのであれば、良さだけ残して悪さを感じないようなまちづくりっていうのをしえてあげたらいい。…（中略）…だからそれは移住者さんだと、やっぱり日本全国いろんなところに住んでいて、つまり高田にはない価値観であったりとか物事の考え方であったりスキルだったりいろんなものを持っている人たちが引っ越してくる—これは町にとってはむしろプラスになる。それはお金には必ずしも直結しないんですけども、そういう新しい感覚みたいなものを、持ち込んでくれる人がいる。で、受け取って地域でそれをいいよねって言ってくれる人たちがいる、そうしたらお互いにいい関係性が築ける」

視点が「開かれた」個人の存在が、地域の魅力であり、かつ、震災をきっかけに外部との積極的な関わりを持つ人たちの存在が、震災前の「閉鎖的な地方都市」と今の陸前高田を分ける決定的要素として挙げられている。個々人の性格の変化が、地域にも変化をもたらしている、ということである。ここにおいては、地域の特徴や性質の本質は、個人にあり、個人に変化が起これば、それに伴い地域にも変化が起こる、という視点が立ち現れてくる。個人は、地域にとり目的であり手段であり、さらに、本質であるという考え方が、ここで見えてくるのである。

個々人の、新たな価値観や視点同士のふれ合いが、地域の魅力を形作るという、このような地域の在り方は岡本さんの今後の展望につながっている。

堀「今までの話で、あまり陸前高田の地域というものに、こだわりがあるという話ではなかったということなのですが、少し抽象的な話にはなりますが、今後陸前高田が将来像としてこういうようなまちになってほしいであるとか、復興の最終地点としてこういうような町、地域になってほしいというようなものはありますか。」

岡本「それで言うとさっきお話したみたいに、外の人たちと、つながる・関わるということに対して寛容な町であってもらえたらそれでいいと思っています。よくある閉鎖的な地方じゃなければいいなと思いますね。「うちの町なんかさあ」っていう人たちが住んでる町いやじゃない？例えばなんかこの地域の人たちって割と自分の地域のことを卑下する人

が割といて、「こんな何もないところでごめんね」みたいな。でもそれってなんか違うと思うので。例えばの話ですけど、出身である僕らからすると当たり前の海一別にきれいだともなんとも思わない—でも、海のそばに住んだことない人たちからすると、ここってこんなに海がきれいなんですかって感覚なんですよ。それって住んでる人たちでは気づかない価値観を外の人たちが、「あなたたちが普段見ている海ってめちゃくちゃきれいなんですよ」っていうと、こっちの地域の人たちの、地域に対する肯定感って少し上がっていく。僕らから言ったらこの町のそれぞれのものっていうのはごくごく当たり前でそれが普通なだけけれども、他の価値観を持ってきた人たちから見るとそうじゃない、すごいいいものですっていうのがたくさんあるので、そういった人と人の、移住者さんと地域の人たちの、化学反応の中で、この町の良さであったりとか新しい価値観が生まれていく土台になる。だから、外の人たちが入ってくるであるとか、外の人たちと関わることに寛容かつ積極的な地域であってもらえたら、良い町になるじゃないかなあという感じ。そしたらこの町に、僕死ぬまで関わります。」

人と人との「化学反応」という言葉が、決定的なキーワードである。地域の中で、また外との間で、人同士が関わり、良い影響や気づきを互いにもたらす「化学反応」により地域の良さや魅力が発見されまた形作られる。個人が、地域の本質であり、性格や魅力の源である。従って、個々人の視点の変化、個々人間の「化学反応」が、地域の在り方に直結する。

3-7、インタビューの小括と考察

岡本さんのインタビューの要旨を整理すると、以下のようになる。①岡本さんは、震災後の活動の中で、個人に向けられていたベクトルが徐々にまわりや地域に向くベクトルと合致していった、②地域の目標は個々人の幸せであり、地域は個人の自己実現の達成の手段である、③地域の本質は、畢竟個人であり、個人同士のふれ合いからなる「化学反応」が、地域の良さを創造する。

地域の目標が個人の幸せであり、その地域は個人を本質とし、かつ個々人のふれ合いや活動で形作られていく。そうして形作られた地域を手段として、個人は自己実現をする。こうした視点の中では、地域と個人は循環的な相互関係を持っていると言えよう。地域を手段とした個人の自己実現が、地域を改良し、その地域に魅せられた個人がまたそれを利用する。ここにおいては、岡本さん自身がそうであったような、個人に向けられたベクトルとまわりや地域に向くベクトルの合致が常態的に起こることになる。重要な点は、個人の幸せという最もミクロな部分を目標点に置くことで、経済指標のような一元的数値をもって地域を興すのではなく、個々の「化学反応」で地域を興すという発想である。「化学反応」は自己実現でもあり、地域振興でもある。個人の欲求を出発点とした、個人に向くベクトルと地域に向くベクトルの合致に至る「化学反応」が、岡本さんの活動の大きな軸であるとインタビューを通じて感じた。

4、追加調査(令和 6 年 11 月 19 日)

追加調査は同年 11 月 19 日 16:30～18:00 に、電話にて私が本調査と同様に岡本さんに対して行なった。同席者はいなかった。追加調査を行った目的は、岡本さんが個人という単位に着目するようになったきっかけは何であったかを調査することであった。先の調査では、岡本さんの活動は「罪悪感」などの個人に向けられたベクトルが、活動が続ける中でまわりや地域に向くベクトルに一致していくという変遷をたどったことが分かった。個人的な思いが地域に関わる出発点になっている個人的な経験が、個人という単位に焦点をあてる岡本さんの活動に影響があったのではないかと考え、これを確認するべく追加で調査を行った。

4-1、岡本さんが個人という単位に注目したきっかけ

なぜ地域を考える上で個人という単位に注目するようになったのかという質問に対し、岡本さんは震災直後の日本全国から支援やボランティアを受けたことが根底にあると答えてくださった。

堀「今個人というところに焦点をあてて活動をされているという中において、どういうきっかけで、個人に焦点をあてた事業をしようということになったかをお伺いしたいです。」

岡本「個人というところにフォーカスをするようになったのは明確に東日本大震災の影響ではあるなと思っています。で、さらにいうと高田暮舎ではなくて、別の法人の、桜ライン 311 の代表というのもさせていただいているんですけども、…（中略）…桜ライン 311 はそもそも東日本大震災で生まれた団体で、自然災害で亡くなる人を減らしていきたいという目的で、防災・減災に取り組んでいる NPO 法人なんです。その自然災害・震災の教訓を後世に伝えて、未来に起こる震災で亡くなる人を減らすっていうところが大きなテーマなんですけれども、事業でお付き合いをさせていただく地域の方であったりとか、日本全国からご寄付をいただくみなさまであったりとか、それぞれに関わっていただく方は全員個人であるっていう風なことからってきますよね。だからその個人の方の共感であったりとか願っているものが集まって、大きな、まいうねりと言いますか、パワーになって、解決につながっていくっていうことを、桜ライン 311 としてやりました。で、そこにおいての感覚っていうのは結構高田暮舎を設立する時にもすごく活きているなっていう風に思っています。」

堀「そのきっかけっていうので大きいところは、桜ライン 311 でボランティアの方であったりとか、地元の人に関わってく中で、その個の活動というかその個がどう思ってるかっていうのが、集合体になって最終的に大きなうねりになってるなっていうのがやはり一番大きいところだったっていう」

岡本「そうですね、まあ実感値としてはそこがすごく大きいなっていう風に思いますね。やっぱり、こうね、まあ東日本大震災っていうことだったからですけれども、文字通り、日本全国から、団体さん・企業さんもいらっしゃいましたけれども、ほんとに数多くの個人の方が、東北に足を運んで、自分たちに何かできることはないかっておっしゃっていた。でまあ逆にね、地域で、私に主に関わってくださっているみなさんも、それぞれが震災でかなり壊滅的な被害を受けている方もたくさんいる中で、「桜ライン 311、おまえらがやっていることはすごく大事なことから、できる範囲のことで、一緒にやっこうよ」っていう風におっしゃっていただく方がすごくたくさんいて、それは一人一人の共感であったり一人一人の願いが集まることで組織として、事業として力になってるっていう。だからね、全体で、全体というよりはそれは、まあ個の集まりを俯瞰的に見れば全体になるんですけれども、やっぱり一人一人の想いとか願いとかそういったものを受け取められるっていうのは組織として強さだなという風に思ったので、そういったものが高田暮舎の方の基本的な考え方の方にも活きているなっていう風には思いますね。」

東日本大震災の教訓を後世に残すという活動に、陸前高田の内外の個人の共感が寄せられ、「自分たちに何かできることはないか」という個々の想いが「うねり」のスタートになったという経験が、岡本さんが個人に焦点をあてるようになったきっかけとして挙げられている。以下にあげるように、個人のこうした想いが出発点になるという点は、岡本さん個人の経験からも導かれている。

堀「個人の想いや願いが集まって大きなうねりになるというところが、岡本さんのそもそもの原点、つまりそもそも地域を念頭に置いていたわけではなく、自分の罪悪感や自己満足というものが原点にあって、それがどんどん変化した。それで、今はまわりと関わる人の中で活動が捉えられてるという、岡本さんの経験に先ほどの話が符合しているなと思ったんですけど、そういった岡本さん自身のそもそもの原点っていうのと、個人というところにフォーカスするっていうところは何か関係はありますか。」

岡本「あーそうですね、それでいうと、あの一、今おっしゃったように僕にとっての原点は自分に対する罪悪感、生き残ったことに対する罪悪感なので、それはやっぱりまさしく個ですし、それを思わせた出来事っていうのも、東日本大震災で、ね、陸前高田市でいうと死者数と行方不明者数があわせて 1800 人後半にのぼったんですけれども、その人たちっていうよりは、僕が直接的に関わったことがある人たちが亡くなっていったっていうことに対する、生き残ったことに対する後悔。まあさらに超具体的に言っちゃうと僕の、その一、えーっと、元々高田にあった実家の、向かい側の二個下の後輩が今回の震災で命を落としてるんですよ。だから僕にとってその震災っていうことを考える時に、一番最も大

きなウェイトがあるのは彼の死なんですよ。だからその彼の死っていうのもやっぱりそういう意味では個なので。だからやっぱりこうね、震災全体でいうとね、あの一日本全体で約 20000 人弱の方が亡くなる、あるいは行方不明になって、岩手県で 6000 人弱の方、陸前高田市で 1800 人後半の方っていう風に、まあ数にはなるんですけども、やっぱりそこは、その一、一人一人の人の集合がその数字だけっていう感じですね、僕の中では。だから、その一、じゃあその一、一人、亡くなった僕の二つ下の後輩に対して自分に何ができるのかてことを考えた時に、まずその、彼に、えーなんでしょうね、恥じない生き方をしたい、みたいなところがやっぱり出発地点になりますし、まあ実際その二つ下の彼が僕の中では最もウェイトが重いわけですけども、同級生であったりとか、お世話になってる方みたいなのがやっぱり何人か亡くなっているのと同じようにその人たちが、えー、僕の事を、まあもう見ることはないんですけども、見た時に、あの一、頑張ってるなって思ってもらえるような生き方をしたい。というのもやっぱりそれぞれ個に対しての想いを、個として、えーっと、受け取って返したい、受け取って返してるっていうのが正しいんですかね、みたいなものなので、ベースが個なんだと思います、私の中では。うん。」

数字として現れる「1800 人」という数字は、「一人一人の集合」である。だからこそ、視点は俯瞰したマクロな部分に行くのではなく、「個」に向いていく。マクロに語られる部分はそうしたミクロな個の集合でしかない。大きな「うねり」としての活動も、自分に何かできることはないか、という個々の想いから発出している。個人という単位に注目し、個人というアプローチで大きな変化をつくろうという方式は、岡本さんの震災で後輩を亡くした「個」の経験や、そこから活動をスタートして個々の想いがうねりとなり活動に昇華した経験が大きな影響を及ぼしていたと考えて良いだろう。

4-2、大きな課題に向き合う上での、個人というアプローチ

自然災害・震災といった規模の大きな課題に直面すると、個人に焦点をあてた活動・行動が多く立ち現れてくる、という話題も追加調査の中であがった。

堀「前回お話を聞いた時に、陸前高田は震災の後 NPO の活動というのが非常に多くなったっていうようなお話があったんですけども¹⁴、そうした、震災を復興していこうという人も、やはり岡本さんのように個人の想いというか、個人的に思うところがあって、そこからはじめたっていう方が多いんですかね。」

岡本「そうですね…まああの一全員が全員必ずそうだったという風には思わないんですけど

¹⁴ 本調査の際に、陸前高田では震災の後、復興に関連した NPO 法人が多く設立された、というお話が岡本さんからあった。それを踏まえた上での発言。

ど、その特にその自然災害っていうところでだと、そういう文脈の方はやっぱり割合として増えるなあっていう風な実感はありますね。つまりその、自然災害で発生する、そのなんだろう、地域に対しての経済的な損失であったりとか、物理的に建物流されちゃったりとか、そういったいわゆる被害っていうのは、その例えばボランティアさんであったりとか個人が、一人で何か片づけられるものじゃないんですよ。あまりにも強大過ぎて。そうなった時に自分にできることって何かっていうことになっていくと、例えば泥かきのボランティアとか一家の中に床上で浸水しちゃって、そうすると家の床の下に大量に泥がたまりますね、だからそれをスコップですくいだすのが泥かきのボランティアであるんですけれども—そういったものっていうのは、一人として作用できる、その家の住人の方のお役に立つっていうことなんですよ。だからそこは個と個なんですよね。そうなってくると、その一え一とかなんでしょうね、東日本大震災って超大括りな中の、一部分だけなら1対1でも、できることがあるんじゃないかっていう風に考えて、例えば、避難されている方のサポートをしたりとか、泥かきをしたりとか、少なくとも自分が作用できるところに関しては、誰かの役に立ったなっていう実感ができるような行動をしたいっていう風に自然災害の時はみんな思われる方が多いんですよ。」

私はこの話を聞いた時に、自然災害のような規模の大きな課題への対処は、畢竟小さな部分の積み重ねである、という解釈をした。自然災害のような規模の大きな課題を一人で全て対処するのは不可能である。個々人にとり得るのは、お話にあったようなボランティアなどの個人レベルでの活動のみである。しかし、そうした個と個の活動は間違いなくそうした復興への歩みの一つである。マクロな視点での前進はこうしたミクロの積み重ねを一体として俯瞰して見ているに過ぎない。私自身も能登の震災ボランティアの中で、一人が行なえるのは、全体の中の一人の方に対することしかないけれども、そうした災害ごみの撤去や泥かきのような個々人レベルのミクロの作業がない限り、復興はあり得ないと感じた。これは、先述した個々人の想いの積み重ねが「うねり」になる、という話を想起させるものである。

4-3、追加調査の小括

8月の本調査においては、岡本さんの活動の原点は岡本さん自身の個人的感情であること、及び、その活動は個人を目標とする点に特徴があることが明らかになった。追加調査においては、岡本さん個人の経験と、岡本さんの活動の基本的考え方の関連をより明確にすることで、前回の調査の結果を深く考察する一助とすることを試みた。追加調査を経て、岡本さんの活動の中で個人の想いが「うねり」となった経験及び岡本さんの亡くなった後輩への想いが、個人に焦点をあてて地域課題を考えるアプローチにつながっていると結論付けた。加えて、追加調査の中では、自然災害のような規模の大きな問題に対処するにあたっては個人が何かをするには畢竟「個と個の間」のアプローチしか行い得ないというお話もあった。蓋し、これを個人の想いが集まり「うねり」となるという話と関連して考えると、そのようなミク

口の積み重ねが規模の大きな問題に向き合うには必須である。これは、個人同士の「化学反応」がマクロとしての地域を形作る、という本調査の小括の内容と連動性がある。

追加調査によって、岡本さんの個人という単位を基点とした地域へのアプローチの源流に震災経験があることが明確に浮かび上がった。

おわりに

私は、地域の復興・振興を考える上で、地域が前提となり個人が成立するのか、あるいは、地域は個人の手段であるのか、といった視点の焦点の設定の仕方が重要であるという想定の下で、地域と個人はいかなる関係にあるのかという問いを立て、本インタビューを考察した。当初私は、被災地域の復興・振興には、その地域に対する、つまり地域という存在を前提とした個人の想いが存在すると考えていた。しかし、フィールドワークを進める中で、地域の復興・振興の中には、個人の想いの発現がまわりまわって地域の復興・振興につながっているという形態があるのではないかと考えるに至った。従って、地域を先とするか、個人を先とするか、地域と個人の関係をいかに捉えるべきかを、問いに設定し、行ったインタビューの考察を行うこととしたのである。

インタビューの考察を経て至った結論として、岡本さんの話から導けるのは、地域と個人は循環的な相互関係を持っているというものである。岡本さんの活動の目標は「個人の幸せ」に設定されているため、こうした視点にあつては、地域という概念を一方的に前提として個人が存在するという立場は存立し得ない。しかしながら、個人間の「化学反応」が地域の良さを生み出し、それがまた個人の手段として自己実現に応用されるという過程においては、①地域の前提は個人、②個人の自己実現の前提は地域、という相互的な依拠の関係が浮かび上がる。すなわち、問いであげた2つの一見相反するベクトルは、実は相互に循環する関係であり、どちらも誤りと捨象することは難しいのである。これは、先行研究の段階で得られた視点と概ね齟齬のないものであり、少なくとも地域または個人という概念をもう一方から切り離し独立して語ることは適当ではないと考えることができよう。

あるいは、地域の本質は個人であるという立場に立つ場合、地域は個人の集合体であり、地域と個人は別概念ではなく、個人の集まりあるいは個人同士の「化学反応」に、「地域」という名前をつけているに過ぎないという見方もできるのかもしれない。震災を経て地域の人々が外の人との交流に積極的になった、という個々人の性質の変化が、陸前高田の魅力すなわち地域の特質として発信されているという現象は、個人同士の「化学反応」が地域そのものを変容させた例である。

このような、個人同士の関わり合いが、俯瞰して見るとまわりまわって「地域」というマクロな部分で語られるものになる、という観点の源流は、岡本さん自身の震災や復興過程の経験にあると追加調査の中で明らかになった。自然災害という、個人ではどうにもできない規模の大きな問題に個人が対処するには、「個と個の間」のアプローチしかとり得ない。しかし、ここにおいては、そうした個人の想いが集まって「うねり」となり、規模の大きな問

題への対処につながる。こうした、震災復興過程におけるミクロからマクロへ、個別から俯瞰へ、という課題対処へのアプローチは、個人同士の「化学反応」が地域というマクロなものを形作るという構図の源流と見て良い。いずれにせよ、視点の大きなマクロの課題を語るに際しては、個人という出発点を念頭に置く必要があることは否定し得ないだろう。

ただ「地域」というラベルは、そのまま「個人の集合」と置き換えられ得るかと言えどもまた難しい。岡本さんの移住定住の話の例にもあったように、地域には、海の見える場所、自然豊かな場所というような、個人という要素では括れない風土などの要素が含まれる。地域を選択する個人の思考の中には、そうした風土が念頭に置かれていることもあるわけである。特に震災や震災の影響などの要素は、個人という単位では括れない地域の特性である。個人の集合は、地域の不可欠かつ中心的な要素であることは否定し得ないが、一方で風土や自然の向き合い方など個人という単位では括れない要素を、「地域」というラベルは包含している¹⁵¹⁶。

本報告書は、「地域」という概念の構成要素のうち、個人の集合としての地域と、個人との関係性について考察したものであったと言える。風土や自然といった、人間には変更し得ない部分ではなく、人為により変更し得る個人の集合すなわち地域の構成要素のうちの可変部分についての考察である。地域の復興・振興というような、地域に何かしらの変化をもたらそうとするには、「地域」の中の可変部分たる個人にアプローチをするのが最も適当である。無論、個人の集合は地域と全くイコールではない。しかし、地域の可変的構成要素である個人に注目するミクロな視点は、地域の課題を考える上で極めて重要なものである。地域の不可変部分である風土や自然などといった要素と個人との関係性については、今後の探究が待たれる課題ではあるが、いずれにせよ、地域の復興・振興という地域に何かしらの変化を起こそうとする際には、地域の可変的な構成要素かつその前提である個人とその自己実現や幸せというミクロな視点が重要なものとなることは疑い得ない。

以上

参考文献

¹⁵ 和辻哲郎は『風土—人間学的考察』（岩波書店、1979年）の中において、「風土は人間存在が己れを客体化する契機であるが、ちょうどその点においてまた人間は己れ自信を了解」し、また「風土の型が人間の自己了解の型である」と主張し風土の特徴が人間の間柄の特徴を規定するとした（同28-31頁。）。風土や自然などの、不可変的な地域の構成要素が個人に少なくない影響を与えることは事実である。こうした地域の不可変的要素と個人との関係性も、地域の復興・振興を考える上で無視できないものであろう。

¹⁶ 個人では括れない地域の一部分についても11月19日の追加調査で岡本さんから話を伺った。岡本さんは、無論地域の風土や歴史など個人の変えられない部分はあるとしながらも、海や山などの要素は多くの自治体を持つ要素であり独自要素たり得ないと指摘された。その地域にしかない独自性で言えば、海や山に代表される地理は重要な要素になり得ず、結局そこに住む人や雰囲気などで独自性を追求するのが最善であるというご意見をいただいた。

石川県「記者会見の要旨（質疑応答）-令和 6 年 4 月 11 日」

(https://www.pref.ishikawa.lg.jp/chiji/kisya/r6_4_11/2.html [最終閲覧 2024.12.10])。

ココロココ 「「ポジティブな過疎地を創る！」陸前高田とヨソモノをつなぐ『高田暮舎』の挑戦」(<https://cocolococo.jp/22777>[最終閲覧 2024.12.10])。

財務省、「財政制度分科会（令和 6 年 4 月 9 日開催）」配布資料

(https://www.mof.go.jp/about_mof/councils/fiscal_system_council/sub-of_fiscal_system/proceedings/material/zaiseia20240409/02.pdf [最終閲覧 2024.12.10])。

ジョン・フリードマン『中国 都市への変貌 悠久の歴史から読み解く持続可能な未来』（第 3 版、谷村光浩訳、2021 年）。

高田暮らし「高田暮舎について」(<https://takatakurashi.jp/takatakurashisya/> [最終閲覧 2024.12.10])。

ちぶり島公式 note（知夫村地域振興課）「「地方の人はさ～」一ちょっと待って！その話、主語が大きくない？ ～課題解決を、ミクロに、もっとミクロに見る～（2024.3.19）」

(https://chibu-vill.note.jp/n/nb1aeb4a993a1?magazine_key=m4eb3c909da7a [最終閲覧 2024.12.10])。

鶴見和子「アジアにおける内発的発展の多様な発現形態」鶴見和子、川田侃編『内発的発展論』（東京大学出版会、1989 年）、241-262 頁。

鶴見和子「内発的発展論の系譜」鶴見和子、川田侃編『内発的発展論』（東京大学出版会、1989 年）、43-64 頁。

鶴見和子『内発的発展論の展開』（筑摩書房、1996 年）。

鶴見和子「内発的発展の理論をめぐって」1991 年

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasess/10/0/10_KJ00002554340/_pdf [最終閲覧 2024.11.4])。

友成真一『「現場」でつながる！ 地域と大学』（東洋経済新報社、2004 年）。

藤原正教「人口減少社会における東日本大震災復興の課題 一気仙沼市での復興支援体験を通じての備忘録一」公益財団法人福岡アジア都市研究所、2014 年

(<https://urc.or.jp/wp-content/uploads/2014/03/46889a0cca9a5017e9daf87ff1eec9ef.pdf>
[最終閲覧 2024.12.10])。

保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』（岩波現代文庫、2013 年）。

望月美希『震災復興と生きがいの社会学―〈私的な問題〉から捉える地域社会のこれから―』（御茶の水書房、2020 年）。

和辻哲郎『風土―人間学的考察』（岩波書店、1979 年）。